

種子生産のための研修

キルギス野菜種子組合
KVS
の
トップ2



KVS事務局長
アマントゥール・サグンバエフさん



KVS生産部長
アディレット・クランベコフさん

種子生産に必要な機材の説明を受ける研修員。中央で説明しているのは、プロジェクトに参加した野菜種子生産の専門家。



試験的に種子を生産するための畑で。種子を採るカボチャの整枝方法について説明を受ける研修員。



種苗会社と契約し、種子を採るために栽培しているキュウリ。



いい種を選ぶのは難しい

キルギスの人たちの手で種子生産を広げてほしい!

種子の品質を判断するポイントを学ぶ研修。トレーナーを目指す農家が参加した。



畑や牧草場が広がるキルギスの風景。

Key Person

JICA専門家
白井雅宏(しらいまさひろ)さん

愛知県生まれ。Uターンで就農後、JICA青年海外協力隊員として2003年から05年までチリに、10年から12年までキルギスに赴任。「輸出のための野菜種子生産振興プロジェクト」では、16年から20年まで専門家としてキルギスで活動した。

キルギス

ふたたび種子の生産地へ

かつてキルギスは良質な種子の産地として知られていた。しかし今、その技術は途絶えている。そんななか、JICAが協力した新たな種子ビジネスが始まっている。

世界の状況を知り意識が変わる

天山山脈からの豊富な雪解け水があり、年間を通して日照時間が長く、土壌が豊かなキルギス。農業が主要な産業で、旧ソ連時代に整備された灌漑施設がいまも活用されている。ソ連時代は種子の大産地で、「キルギスの種」は良質な種子のブランドだった。しかし、ソ連崩壊後は種子生産の技術が途絶えてしまった。そんな種子生産を再興するJICAのプロジェクトに2016年から20年

まで専門家として参加したのが白井雅宏さんだ。

白井さんとキルギスとの出会いは11年前までさかのぼる。愛知県で農業に取り組んでいた白井さんは、その経験を途上国で生かすためにJICA青年海外協力隊員としてキルギスへ。「帰国後に同国でのプロジェクトを知り、協力隊とは違う新しい形で自分の力を役立てたいと考えました」。

今回のプロジェクトが目指すのは、肥沃な国土を生かしたビジネスとして種子生産を軌道に乗せることだ。そのためには、種苗会社

いる。

さらにKVSスタッフの成長も著しい。事務局長のアマントゥール・サグンバエフさんと生産部長のアディレット・クランベコフさんはまだ若いですが、ともなうくはならない存在になっている。「ふたりとも日本への留学経験がある。最初が通訳としての採用でした。しかし、仕事に必要な農業や種子生産、さらには契約について学び、今では国外の取引先からは、「このふたりがいれば安心して契約できる」とまで言われています」と白井さんはうれしそうに話す。

プロジェクトは20年で終了。トレーナーは24人、種子生産を行う農家は76軒で、日本や韓国などの種苗会社7社と契約するまでにいった。しかし本番はこれからだ。白井さんはプロジェクト終了後もKVSの活動を気にかけていて、メールなどを活用しアドバイスも続けている。

同時に白井さんは、キルギス野菜種子組合(KVS)の能力強化に取り組んだ。KVSは種子生産を行う農家の集まりで、種苗会社との契約の窓口となる。「種子生産が軌道に乗るまでまだ時間がかかりました。そこで、種子生産以外の仕事も組合で考えました」。たとえば国内のソラマメの産地を訪ねて種子の生産を委託し、国内での需要を掘り起こした。野菜や種子生産のコンサルタント事業も可能性があると白井さんは考えて

協力量隊時代も含めれば6年にわたってキルギスと関わり、プロジェクトを離れてもなんらかの形でKVSをサポートしたいと考えている白井さん。「こうしたプロジェクトでは、技術を伝えることは、人を育てることにはかなりありません。キルギスでがんばっているふたりをこれからも見守り、応援したいと思っています」。